日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.17

〒731-0135　広島市安佐南区長束3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2007年7月発行

隣人とは誰のことか

「『さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」
（ルカによる福音書10章36~37節）

キリスト教関係の福祉施設には、よく“善いサマリア人”の絵が、玄関正面の壁面一杯に描かれていたり、額に入れて飾られています。これこそが福祉の精神だ、と絵で語っているのでしょう。しかしそれが、単に、善いサマリア人を模範に掲げ、此れに倣うことを奨励しているだけだとすれば、善いサマリア人の譬え話の理解としては、甚だ不十分だと言わねばなりません。では一体、此れは何を語っているのでしょうか。

或る律法の専門家が、イエスを試そうとして、「何をしたら、永遠の命を得られるか」、と尋ねました。そこで、主イエスは逆に、「聖書には何と書いてあるか」、と問い返されました。問われて彼は、得々と、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」、と言う申命記６章５節と、「隣人を自分のように愛しなさい」、と言うレビ記１９章１８節の言葉を挙げました。主イエスは此れに対して、「あなたの答えは正しい。その通り実行しなさい。そうすれば永遠の命は得られる」、と答えられました。「その通り実行しなさい」、と言われて、彼は内心ギックとし、一瞬良心が疼いたのでしょう。とても胸を張って、「私は隣人を自分のように愛しています」、とは言えなかったからです。そこで彼は、何とか良心の疼きから逃れようと、「では、わたしの隣人とはだれですか」、と問い返しました。隣人を限定して、親しい者、例えば、親、兄弟、夫婦、仲の良い友人等に限れば、自分のように愛することも、さほど難しくはなくなるからです。そこで彼は、自分を変えるのではなく、隣人の概念を変えようとして、こう問うたのですが、此れに対する答えとして、主イエスが話されたのが、“善いサマリア人の譬え話”だったのです。

或るユダヤ人が、エルサレムからエリコに下る途中、追いはぎに襲われて、身ぐるみ剥がれ、殴りつけられ、半殺しにされて、道端に投げ捨てられました。最初に祭司が、続いてレビ人が、通りかかったのですが、いずれも見て見ぬ振りをして通り過ぎて行きました。次に、サマリア人が通りかかりました。彼は、その人を見ると、憐れに思って近寄り、持っていた油と葡萄酒を傷口に注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱し、翌日には、当座必要な費用を宿の主人に手渡した上、尚不足分があれば、帰りに再び立ち寄る際に支払うから、と言い残して、宿を発ちました。日頃ユダヤ人は、サマリア人を蔑み、差別していましたから、こんな場面では、サマリア人は腹いせに、罵声の一つでも浴びせて、立ち去ってもよかったのです。しかし彼は、そうしなかったばかりか、憎しみに打ち勝ち、差別、偏見の壁を越えて、助けの手を差し伸べたのです。

主イエスは、話し終えられると、律法の専門家に、「誰が追いはぎに遭った者の隣人になったと思うか」、と問われました。問われて彼は、「その人を助けた人です」、と答えました。此れから明らかなように、隣人とは、“ある”ものではなく、“なる”ものなのです。自分から隣人になろうとしない限り、隣人と言うものは、何処にも存在しないのです。

こう言われた主イエスは、自ら私たちに近づき、私たちの隣人となってくださいました。それによって私たちは、神に生きる者となったのです。善きサマリア人とは、誰あろう、実は、主イエス御自身のことだったのです。その主イエスが言われるのです。「行って、あなたも同じようにしなさい」、と。此れ以上に強い促しの言葉はありません。

三輪恭嗣

（２００７年　５月２０日の礼拝説教より）